

第3回日本・太平洋研究ブラジル会議

吉田ルミ子

(在モンテビデオ海外調査員)

1993年11月4日・5日の2日間、サンパウロ市パツラフンダ地区のラテンアメリカ議事堂において、第3回日本・太平洋研究ブラジル会議(III Encontro de Estudos sobre Japão e Pacífico)が開催された。この会議は元アジア経済研究所客員研究員で現カンピーナス大学教授のジルソン・シュワルツ氏が主宰する「日本・太平洋研究ブラジル協会」(Sociedade Brasileira de Estudos sobre Japão e Pacífico)が招請したもので、太平洋を媒介項として日本とブラジルを結ぶ地理的、歴史的、地政学的小よび文化的交流に関する情報交換の場を提供することを企図している。

参加人数はおよそ120名で筆者はオブザーバーとしてこれに参加した。会議の第1日目には、前経済政策大臣で現ジェットゥリオ・バルガス財団日本研究センターのF・H・バルボザ教授により、「経済調整と安定化—アジアの諸例」と題する基調講演が行なわれ、第2次世界大戦後の日本経済の調整を歴史的に回顧しながら、日銀の通貨政策、対インフレ政策、石油ショックへの対応等にふれた中身の濃い報告が提起された。このあと小会議室に分散して分科会(2日間を通じて27分科会)がもたれた。ペルー国籍で現サンパウロ大学歴史地理学教授のエンリケ・アマヨ氏のブラジルと太平洋を結ぶ交通に関する報告は、ペルーのカヤオ港およびチンボテ港が日本と南米大陸を結ぶ接点となった歴史的事実に着目し、ブラジルと太平洋を結ぶ境界点としてのアマゾン近未来の日本—太平洋間のパイプとして設定した大胆な提言を含んでいる。つまり、改めて海路と陸路とを結ぼうとする開発方式についてであった。

このほか第2日目の分科会報告として、「日本の国際

化の戦略」と題し、日本が世界への統合を志向しながらも、世界から孤立していった歴史に言及したB・J・デ・アラウジョ教授等の共同報告、日本の伝統的権威主義と融通性に着目したディルセウ・コウティニョ氏の示唆に満ちた報告「モデルとしての日本」等が注目された。本会議で最も脚光を浴びたのは、やはり元アジア研客員研究員で現在パリ在住(CNRS研究員)のエレナ・スミコ・ヒラタ氏が監修し、サンパウロ大学出版界が最近上梓した論文集『日本型「モデル」について』(原著名:Sobre o “modelo” japonês)の著者たちを囲むパネル・ディスカッションであった。同書は日本における労働力の組織法を、中根千枝の日本のタテ社会論に言及しながらブラジルおよびフランスの経営学研究者が縦横に論じた研究書で、邦訳が待たれる。当日のパネラーたち(カンピーナス大学J・P・ロベス教授等5名)による、日本製品の質と競争力、下請け労働力と労働組織の民主化等についての分析は、同書のエッセンスを抽出した感があった。第2日目最後の分科会「北米自由貿易協定(NAFTA)、南部共同市場(Mercosul)と太平洋」では、ジェットゥリオ・バルガス財団のヨシアキ・ナカノ教授らによる共同報告がフロアからの熱心な質問を喚起していた。

なお、会場整理のため在サンパウロの日系一世ならびに二世の方々が手際よく連絡・調整に当たっておられ、筆者自身もたいへんお世話になった。ここに記して感謝したい。また、会場への行き帰りに垣間見たサンパウロ市の活況は、ブラジルがもつ底力のようなものを感じさせた。